# 編集後記

大学で教鞭を揮う者は、誰しも一応の「学問」研究者ということになっている。日本の大学は、アメリカ、ロシアに次いで、数の上では世界第3位だし、学問研究者も世界有数の多きにランクされるであろう。ところで問題は、学問研究の本質は何か――ということである。一般に言われることは、学問は「真理」を追求するものだということになっている。この「真理」探求が学問研究の目的であり、従って本質であるというのである。それでは「真理」とは何か？世に数多い学者先生の中で、これに対してマアマアの解答をなし得る人は余りいないであろう。私はこれまで書物の中では、このマアマアの哲人に邂逅したことはしばしばあるけれども、実際の経験に於いてこのマアマアの大先生にお目にかかったことはない。もっともいわゆる研究業績の豊かな先生に遭遇したことは何度かある。しかし私の確信する限りでは、それらの先生方に殆んど共通してあるのは、何よりも「業績」を楯にして得られる学問的、社会的名誉心、地位、自己の優越感の誇示、虚栄心の満足等といった余り感心できないもので、「真理」は殆んど二の次ぎにされていた。彼らが「真理」を口にするのは、業績が生命力を持つためには「真理」に裏打ちされていねばならず、ために付け焼刃的に巧みに「真理」の周囲を撫でて回っただけ――という虚構を糊塗せんがためである。学問を「真理」に直結して云々するのが、およそ根本的な間違いなのである。所謂我々の間に流布している「学問」とは、「真理」の外周を撫でてみた「作文」に過ぎない。（ついでに言えば、自然科学は、自然の単なる「事実」関係を解明するだけのものであり、形だけでも「真理」を追求せんとする精神科学よりも、純価値的には下位に置かるべきであろう）「真理」は所詮学問の与り知らぬ世界に在る。何故なら「真理」は本来、生命的なものであり、単純でありながら同時に無限の発展性、多様性を内包したものであり、到底学問如きが立証し得ない神秘さを湛えているからである。（「事実」と「真理」を混同してはならない）「真理」の特性は、その顕現の形式が、極めて美しい、生命的な機能美を常びることである。詩人キーツが歌ったように「美は真にして、真は美なり」である。従って審美眼のない、或いは乏しい人間には、本当の意味の「真理」を

把握し味得する能力も資格もないということになる。審美眼なくして「真理」の周囲を撫でて回った人間――所謂学者には、多くの場合、奸智な野心、悪知恵ばかり身につく。高慢、過信、猜疑、野心、陰湿、巧言、殷懃、冷淡、虚飾、――これら人間の醜面を最も端的に保持しているのが、例の「真理」の周囲を上撫でするのを得意とする学者先生である。

学問研究者は、まず知る必要がある。「真理」は「作文」の中には到底在り得ないことを。（単なる「物知り」や「学問の職人」は論外である。）「真理」は「作文」を旨とする学問に於いてよりも、より多く行為そのものの中に、完成された人格の中に、象徴的には何よりもまず芸術作品の中に存在するからである。「真理」は何か註釈を加え、説明されるべきもの、などというのは、全く学問の独善である。もう一度言おう。「真理」とは本来生命的なもの、その顕現の形式に於いて至高の機能美を湛えたもの――そのもの自体を言うのであり、学者の書く高慢な解説や理屈や作文などでは決してない。従って、美しい山のたたずまい、川の流れ、夜空の星のきらめき、恋の切なさを歌った詩人は、学者先生よりもはるかに「真理」にまみえた人だったであろう。そこいらの立派な先生方の論文も、所詮ボードレールの詩の一行に如かない。杜甫に対するどのように精細な研究も、その「真理」の力強さに於いて、到底杜甫の詩には及ばない。

「真理」とは以上のような崇高な意味で用いられるべきものなのである。ここで私は提案したいのだか、学問は「真理」を追求するなどという最初から間違った前提を放棄して、「学問、研究は真理の周囲を回るだけのもの」と置き直し、学者研究者は実害のない単なる物知り、学問の職人はマアマアとして、如何にも学問、真理を体得したような錯覚をし、高慢に小賢しく立廻る輩は、すべて大学から追放すべきである。こう見て来ると、全国の大学で本当に「真理」を自覚し、教えている先生は、まず極めて少ないであろう――という察しがつくであろう。そして実際、現在の殆んどの大学は、寺田寅彦が嘆いたように、ノミが果して自分の体の何倍跳ぶか、といった類の所謂アカデミックな研究に多くの時間と労力を費やしているのである。

大学は所謂学問よりも、より多く「真理」を教える場でなくてはならない。同時に自から成る「美的秩序」を有する場でなくてはならない。

現在の日本の大学の奇怪さを見よ！これは余りにも頭と心の貧弱な先生方、学生が圧倒的に多いためである。「真理」は隅っこにやられてしまっている。凡人俗人がいくら頭を並べても、誇るに足る精神文化はついに出現しないであろう。日本の精神文化の不毛時代は、まだ当分続くであろう。現に精神文化の一典型である文芸では、漱石、鷗外に匹敵する小説家はずっと出ていないし、詩では三好達治に匹行するほどの詩人は出て来ない。 (G)

## 執筆者紹介 (執筆順)


| | |
|---|---|
| 沖　浩子 | 本学短期大学部助教授 |
| 後藤一美 | 本学文学部講師 |
| 井上富江 | 本学文学部講師 |



別府大学英語・英米文学論叢 第四号 1971

昭和47年3月1日　印刷
昭和47年3月8日　発行

編集兼発行者　別府大学英語英文学会
代表者　佐藤義詮
発行所　別府大学英語英文学会
〒874 別府市北石垣82
別府大学文学部英文学研究室内
Tel (67) 0101
印刷所　日新印刷㈱